

配布資料

アート・建築・音楽・詩・演劇・食…多彩な表現が交差する、歩いて巡れる“都市の芸術祭”

第一回 前橋国際芸術祭 2026 全アーティスト・プログラム発表



前橋国際芸術祭 2026 実行委員会（実行委員長：田中仁）は、2026 年 9 月 19 日 [土] から 12 月 20 日 [日] までの 80 日間、群馬県前橋市の中心市街地を舞台に開催する「第一回 前橋国際芸術祭 2026」について、アーティスト・プログラムの全容を発表いたします。

本芸術祭は 2016 年に前橋市が策定したまちづくりビジョン〈めぶく。〉を起点に、民間主導で進められてきた都市再生のプロセスに呼応しながら、アートを通じて前橋の現在地と未来像を描き出す、2 年に一度（ビエンナーレ形式）の国際芸術祭です。記念すべき第一回の開催テーマは「めぶく。Where good things grow.」。現代アートにとどまらず、建築・音楽・詩・演劇・食など、多彩な領域から 70 組のアーティストを招聘し、さらに地元・前橋のクリエイターと連携する 20 以上のプログラムを実施いたします。

展示会場は市立現代美術館〈アーツ前橋〉をメインに、建築家の藤本壮介が設計を手掛けた〈白井屋ホテル〉、平田晃久の〈まえばしガレリア〉など、ホテル・ギャラリー・店舗・空きビル等 20 箇所以上の個性的な施設と、アーケード商店街や公開空地にも作品を設置。約 500 メートル四方のエリアに集積する現代建築群とアート作品を徒歩で巡る、ウォークアブルな芸術体験を創出します。

前橋が「現代建築とアートの聖地」となる未来を目指す、新たな国際芸術祭のはじまりです。是非ご期待ください。

アートが「めぶく」、建築の聖地へ。

The City as Architectural Mecca and Incubator of the Arts

2016年に策定されたまちづくりビジョン〈めぶく。〉を引き継ぎ、新たにはじまる前橋国際芸術祭は、中心市街地に点在するアートのスポットを結び、芽吹きから若木へ、さらに感性を育む森へと、変容し続ける前橋の都市風景に人とまちをつなぐウォークアブルなアート体験をちりばめていきます。



藤本壮介と平田晃久の共同設計による千代田町中心市街地再開発計画



※デザイン案は検討中のものです。今後の詳細設計によりデザインが変更になる場合があります。

前橋クリエイティブシティプロジェクト共同企業体による JR 前橋駅から群馬県庁に至る
総延長 1.5km の空間デザイン「稜線がつなぐ まちづくり_前橋リッジライン」



河岸段丘を表現した「白井屋ホテル」外観
(撮影：木暮伸也)



平田晃久設計「まえばしガレリア」
(Photo by Daici Ano)



SUPPOSE DESIGN OFFICE「ばばっかわスクエア」
(撮影：木暮伸也)



ジャスパー・モリソン「Babakawa Public Toilet」
設計：高濱史子小松智彦建築設計 (撮影：木暮伸也)



藤原徹平「ばばっかわ Garden Park」
ばばっかわ通りで進行中の植物を感じる立体庭園 (イメージ)



山田紗子建築設計事務所がオリオン通りで
設計中の複合ビル (イメージ)



長坂常／スキーマ建築計画「なかや」



駒田剛司・駒田由香・久保田祐基「広瀬川 PROJECT」



前橋 太陽の鐘 (景観設計：藤本壮介／撮影：木暮伸也)

生まれ変わる都市のエネルギーを享受する。

Experiencing the Energy of a City Reborn

1990年代後半から中心市街地の衰退が続く前橋は、まちづくりビジョン〈めぶく。〉の策定以降、アートの感性を取り入れた都市空間の再整備が、川沿いの親水空間からアーケード商店街へひろがっています。徒歩圏内に〈アーツ前橋〉、〈白井屋ホテル〉、〈まえばしガレリア〉など、最先端のアートに触れられる現代建築群が集まり、シャッター通りとなっていたアーケード商店街ではユニークなローカルビジネスが続々と誕生しています。まちづくりの当事者たちが空きビルなどで仕掛ける劇場やアート民泊、音楽や食のプログラムも、変容する前橋のエネルギーを感じさせてくれるでしょう。私たちは2年周期で開催されるこの芸術祭を、国内外から招くアーティスト、地元・群馬の人々、そしてこの壮大な風景創造の挑戦に立ち会ってくださる鑑賞者の皆さまとともに作り、ともに楽しんでいきます。



渋谷慶一郎《Abstract Music》(グラフィックデザイン: 八木肇二郎)



アレクサ・クミコ・ハタナカ (Photo by Johnny Nghiem)



川俣正《Tree Hut Project》



オープニングライブを飾るジム・オルーク



ラスムス・ムンク (Photo by Mathias Eis) と高田裕介



蜷川実花 with EiM《Breathing of Lives》2023

NEW !

世界各地に点在する川俣正の《Tree Hut》、 前橋では住民参加型プロジェクトとして実施。

無加工の木材や建築廃材などを用いて、既存の都市空間や自然環境に適応・介入するサイトスペシフィックなインスタレーションで知られるアーティスト川俣正。制作プロセスそのものを作品とする〈ワーク・イン・プログレス〉の代表的な作家であり、世界各地で芸術・建築・公共を問う野外プロジェクトを展開している。街路樹などに設置する《Tree Huts》は、川俣が2008年にニューヨークで初めて制作し、その後も各都市で展開しているアートプロジェクトである。前橋では前橋国際芸術祭のはじまりを記念するシンボルとして、アーツ前橋正面のケヤキに1基を現地制作する他、周辺の公開空地にワークショップで市民が構想した参加型プロジェクトとしての《Tree Huts》を設置する。これらは前橋市中心市街地の再開発とともに成長し、新陳代謝し、変化し続ける長期的なパブリックアート・プロジェクトとして計画されている。



《Tree Hut with tree》2021 (Photo by Hiroshi Noguchi)

人と機械が共創する、 前橋国際芸術祭 2026 オープニングライブ。

9/19 (土) ~9/21 (月祝) の3日間にわたって開催する前橋国際芸術祭 2026 のオープニングライブ。会場はゴールドセラミックタイルの威容が目を引く銀座通りの廃ビル〈ハウゼビル〉。クリエイティブコーダー・田所淳、アーティスト・小野田賢三、「音園/OtoZono」の細島マサによる共同プロデュースで、ジム・オルーク、カール・ストーン、クリストフ・シャルルら国際的に活躍するミュージシャンが前橋市中心市街地に集結。大規模な再開発工事を控え空洞化が加速するエリアに、音楽と映像、デジタルと身体が融合する特別な3夜を創造する。1980~90年代、産業衰退後のデトロイトや壁崩壊後のベルリンでは、打ち捨てられた工場や発電所跡地が電子音楽の実験場となった。言語を介さないリズムが、既存社会のシステムからの解放と創造的な連帯を生み出していく。



ジム・オルーク、カール・ストーン (Photo by Masa Hosojima)、クリストフ・シャルル、田所淳

世界一の美食家・浜田岳文が、 トップシェフたちと問う“Food as Art?”

世界128カ国以上を訪れた美食評論家であり、食を文化や芸術の領域として捉えるガストロノミーの探究者として、レストラン業界に大きな影響力を持つ浜田岳文が、前橋国際芸術祭 2026 で“Food as Art?”を提起するプロジェクトを始動。藤本壮介や永山祐子らスターアーキテクトが手がけた建築や前橋の街を舞台に、「食は現代美術の領域に入り得るか？」という自らの問いを検証する多彩な食体験を、国内外で活躍する気鋭のシェフたちと共同で開発・提供する。



浜田岳文、ラスムス・ムンク (Photo by Mathias Eis)、高田裕介

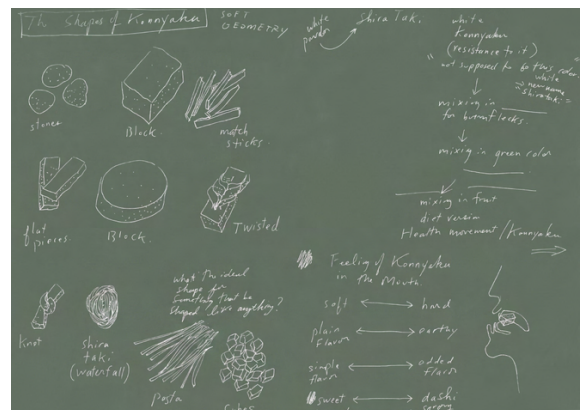
インバウンドの時代にこそ深く掘り下げたい、この土地と街と人の物語。

In the Age of Global Tourism, Delving Deeper into the Stories of the Land, City and People

地方に大きな経済効果をもたらしているインバウンド。いま世界が日本文化の固有性に注目していますが、前橋市中心市街地を歩く訪日客の姿は残念ながらほとんど見られません。そのため、第一回 前橋国際芸術祭は、世界水準の現代アートを地方都市でも享受できるショーケースをつくと同時に、赤城山に抱かれた暮らしの風景や、近代製糸や前橋空襲にまつわる先人たちの苦難の物語を掘り起こし、グローバルなアートの文脈で翻訳・発信するリサーチ型のプロジェクトにも力を入れていきます。この芸術祭は私たちの足元に埋もれた歴史や土地とのつながりをアートで結び直し、この時代の何処に立っているのか、何処へ向かっていくべきなのかを探る旅でもあるのです。



吉開菜央《風呼び》より



マイク・エーブルソン（蒟蒻についてのリサーチより）



尾花賢一+石倉敏明《山と風と十二様》イメージ



マームとジプシーの藤田貴大



ナイトウカツ《Behind Their Gaze, There I am》



山縣良和「ここにいてもいい リトゥンアフターワーズ」展（2024、アーツ前橋）

日系カナダ人のクィア・アーティスト、アレクサ・クミコ・ハタナカの前橋への旅。

日本、ベトナム、韓国など、世界各地の紙づくりをリサーチし、手漉き和紙を素材にテキスタイル・衣服・彫刻などを制作する日系カナダ人アーティスト、アレクサ・クミコ・ハタナカ。第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展に選出され、世界的な注目を集める新鋭が、前橋で滞在制作を行い、その成果をアーツ前橋で発表する。風土が生み出した伝統の技を訪ね、環境危機の時代に必要な智慧として提起する彼女のシリーズに、どんな新作が加わるだろうか。



Photo by Marco Pavan

空襲の戦災遺構で行うリーディングライブ、マームとジプシーと原田郁子の『koe oto note』。

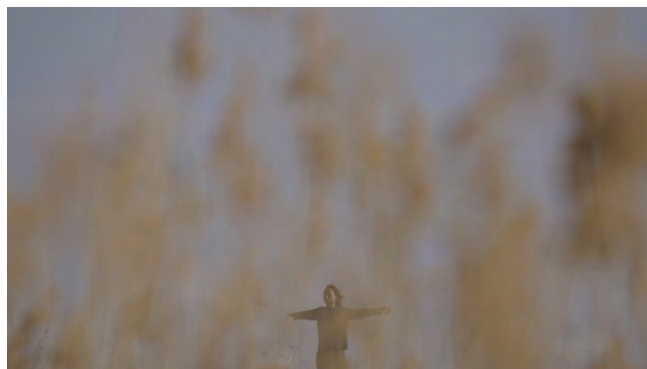
演劇作家の藤田貴大はカンパニー〈マームとジプシー〉を主宰、全作品の脚本・演出を手がける。北海道伊達市出身の藤田にとって、前橋は母方のルーツで、自身の出生地でもあり、幼少期より毎年祖父母に会いに訪れた街である。2012年、〈マームとジプシー〉は、沖縄戦に動員された少女たちに着想を得て創作した今日マチ子の漫画『cocoon』の舞台化に際し、初めて沖縄に流れる時間と記憶に触れた。以降、沖縄に通いながら、沖縄のみならず様々な土地の戦争・痕跡・記憶をヒアリングしながら作品にしてきた。その中で、藤田と、舞台『cocoon』で主演・サン役を務めた俳優・青柳いづみ、音楽を担当したクラムボンの原田郁子は、本公演と並行してリーディングライブを行ってきた。今秋の前橋国際芸術祭2026で3人は、前橋空襲の戦災遺構・旧安田銀行担保倉庫を舞台に、リーディングライブ『koe oto note』を2日間行う。あの頃の未来である今、〈その先〉を生きる私たちの声・音・言葉をつなげていく。



左から藤田貴大、原田郁子、青柳いづみ

赤城山をテーマにした吉開菜央の新作を公開。

上州の冬の風土を特徴づける季節風〈からっ風〉は、〈赤城おろし〉とも呼ばれ、群馬県南部を中心とした地域において農作業や生活に深く結びついてきた。赤城山の山頂の一つである地藏岳には、死者の魂が還るとされる場所があり、山上で死者の名を呼ぶとその面影が現れるという〈魂呼び〉の民間信仰が伝わる。映像作家・ダンサーの吉開菜央は、前橋を拠点にリサーチを重ねるなかで、この風が人々の記憶や生活にどのように関わってきたのかに着目し制作を行った。風は湖面に波紋を描き、草木を揺らしながら身体を通過し、此岸と彼岸のあわいにある世界を浮かび上がらせる。本芸術祭では、風や声を媒介に、風景に立ち現れる物語を描いた映像作品《風呼び》を発表する。



吉開菜央《風呼び》より

ファッション・詩・映画・演劇… 多彩な表現があぶり出す前橋の日常の本質。 Fashion, Poetry, Film, Theater—A Diversity of Forms Revealing the Essence of Everyday Maebashi

前橋は日本近代詩の父・萩原朔太郎の生誕地で、その後も多くの詩人を輩出する〈水と緑と詩のまち〉です。前橋国際芸術祭では現代アートにとどまることなく、この街の日常に宿る記憶や物語を呼び出し、表現してくれるクリエイターを、詩・演劇・音楽などからも招聘。2025 年から前橋市中心市街地を舞台とするパブリックアートの設置計画や、アーティストが商店街で暮らしながらリサーチや作品制作を行うアーティスト・イン・レジデンスを、群馬県が推進する〈群馬パーセントフォーアート〉と連携して実施してきました。その成果発表でもある2年に一度の芸術祭開催を積み重ねていくことで、アートやアーティストの存在は、この街の日常になっていくでしょう。



最果タヒ《詩の加速》2020 グラフィックデザイン：佐々木俊
(写真：丸尾隆一)



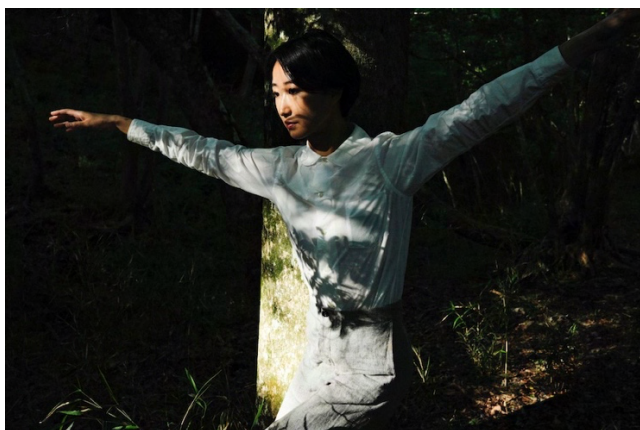
dot architects + contact Gonzo 鉄道芸術祭 vol.10
「GDP(Gonzo dot party)」(写真：吉見峻)



白川昌生《駅家の木馬祭り》



クワクボリョウタ 《LOST#16》2017 (Photo by Yoshisato Komaki)



小暮香帆『FIELD BODY — choreographic improvisations.』
(Photo by Chikashi Kasai)



《sub low》ニャムコム「おそろいのネグリジェ」2020 (撮影：Lo.cul.p)

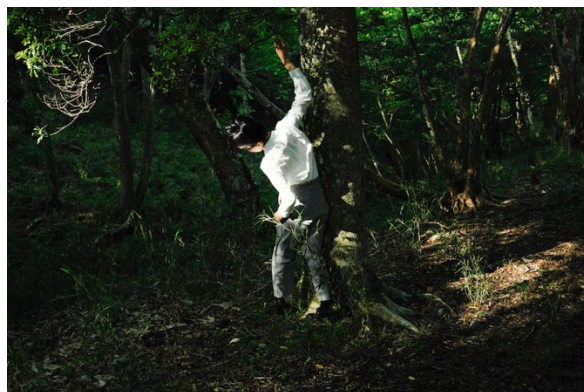
マルタン・マルジェラの旅する展覧会、 日本の近代製糸はじまりの地・前橋へ。

この春、東京の九段ハウス、京都のタカ・イシイと、2つの会場を旅してきたマルタン・マルジェラの展覧会が、再編成で前橋国際芸術祭 2026 にやってくる。2008 年にファッション界を退き、アーティストに転身したマルジェラは、人間の身体や痕跡・時間・不在といった主題を軸に表現活動を継続しており、そのアートワークは日常の中で見過ごされがちな物や状況への鋭い観察から生まれ、平凡なものを非凡なものへと転化させる力を持つ。群馬のプログラムでも、マルジェラにとって重要な「私的な空気感」を反映した、コラージュ、絵画、ドローイング、大型彫刻、アッサンブラージュ、映像作品など多様な作品を展示・紹介する。



気鋭のダンサー・小暮香帆の新プロジェクト 『FIELD BODY — choreographic improvisations』

日本のコンテンポラリーダンスシーンを牽引する若手として、リアリティと強度のある身体を追求する小暮香帆。国内外の演出家や音楽家からの出演依頼も多く、近年は身体一つだけで美しく踊るのではなく、音・光・オブジェなど様々な外部要因と対話するようなダンス作品を発表している。前橋国際芸術祭 2026 では山田紗子の《outline bar》やドットアーキテクツの《アーキジム》など、建築家たちのインスタレーション作品とのコラボレーションを、様々な空間と即興で呼応するダンスシリーズ『FIELD BODY』として立ち上げる。



小暮香帆 (Photo by Chikashi Kasai)

クワクポリョウタと前橋工科大学が、 プロジェクト駆動型演習で次世代を育成。

電子デバイスを素材とする装置的作品や、鑑賞者の内面に働きかける光と影のインスタレーションなどで知られるクワクポリョウタと、前橋工科大学建築・都市・環境工学群の阿部研究室が、元編物学校の〈寺町藝術センター〉の2階でサイトスペシフィックな作品を現地制作する。かつて前橋城下で寺社が栄えた三河町に位置することから、「寺町」の名を冠する同センターの建物は、戦後復興期で計画された代表的な防火建築であり、昭和から平成にかけて編み物の技術を学ぶ多くの女性たちを受け入れてきた。同地区でリサーチを行ったクワクボは、市街地の8割が焦土化した戦災を経て、現在の前橋を形作ってきた線路・アーケード・国道・水路などの〈境界〉の一つとして寺町藝術センターの存在を捉え、建物自体の構造を使った作品制作を試みる。そのプロセスには前橋工科大学の学生も関わり、人材育成としての機能も担う。



クワクポリョウタ

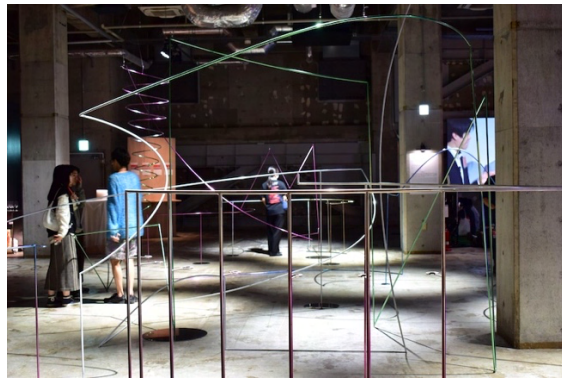
第一回の開催テーマは「めぶく。」

Theme of the Inaugural Biennale: Mebuku — Where good things grow.

「めぶく。Where good things grow.」は民間の視点から前橋市の特徴を調査・分析し、前橋市はどのようなまちを目指すのかを示す〈まちづくりビジョン〉として、2016年8月に策定されました。前橋市は田中仁財団との都市魅力アップ共創推進事業としてこの取り組みを行い、策定のための調査をドイツのコンサルティング会社〈KMS TEAM〉に依頼。その結果、前橋について「Where good things grow. (良いものが育つまち)」という分析がなされました。この英文に前橋市出身のコピーライター・糸井重里さんが新しい解釈を加え、日本語で「めぶく。」と表現されました。このビジョン策定から10年の節目に開催する前橋国際芸術祭2026では、参加アーティストとともに人々が未知のものに触れ心を動かすアート体験を創造し、街のあちこちで未来を彩る「めぶく。」を起こしていきます。

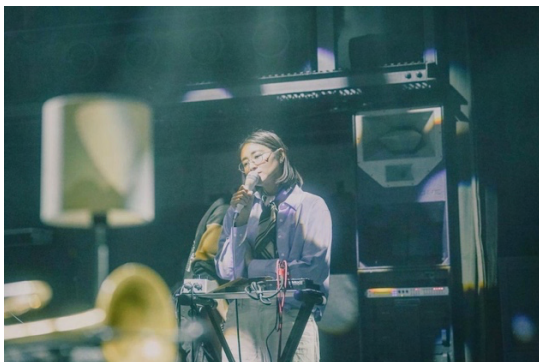


ミロコマチコ 《ヘデラとミズ》



山田紗子 《outline bar (ART WEEK TOKYO 2023 初出)》

MEET YOUR ART FESTIVAL2024「New Era」ART EXHIBITION 展示風景



和田彩花 (LOLOET でのパフォーマンス風景)



たんぼぼの家《New Traditional》(撮影：西岡潔)



映画『ビッグ・リトル・ファーム 理想の暮らしの作り方』

© 2018 FarmLore Films, LLC



田所淳《Consonance and Dissonance》2021

NEW !

LOLOET Workshop Live

「本当は言いたかったこと」

和田彩花＋群馬大学共同教育学部附属中学校音楽部

アイドルグループ「アンジュルム」で初代リーダーを務めた後、アーティストとして活動しながら美術やフェミズムに関する発信・執筆を行なっている和田彩花。本企画は和田と群馬大学附属中学校の生徒たちが、心のなかに秘めている言葉や、街で見つけた音や道具を集め、楽譜や正解に縛られない即興演奏をつくりあげるワークショップ公演である。生徒たちは和田が所属するバンド LOLOET のサポートのもと、それぞれの音や声の出し方、感じ方、関わり方の違いを受け入れ、その双方向の学びの成果をアーケード商店街の路上ライブで披露する。



LOLOET

ミロコマチコ at SHIROIYA 《空気に根をおろす》

白井屋ホテルが毎年11月下旬から1月にかけて開催し、馬場川通りの冬の風物詩として定着している「アートイルミネーション」は、藤本壮介が設計した同ホテルのグリーントワー（緑の丘）を、毎年異なるアーティストが光の演出で幻想的に彩り、地域の人々と宿泊客を楽しませているライトアップ・プロジェクトである。今年は前橋国際芸術祭2026とコラボレーションし、画家で絵本作家のミロコマチコを奄美大島から招聘。芸術祭の開催テーマ〈めぶく。〉にちなみ、画家が暮らす南の島から飛来した〈空想の種〉が、グリーントワーに根をおろし次々と芽吹いていく、生命力あふれる物語世界を創出する。



ミロコマチコ

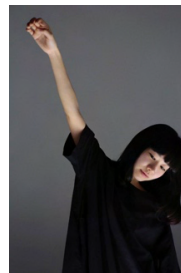
たんぼぼの家 《NEW TRADITIONAL》

アートと社会の新しい関係をつくる「ABLE ART MOVEMENT（可能性の芸術運動）」を1995年に提唱し、〈アート〉と〈ケア〉の視点から、奈良を拠点にさまざまな事業を実施している市民団体〈たんぼぼの家〉。《NEW TRADITIONAL（ニュートラ）》は、人が古くから続けてきた〈ものをつくる〉という当たり前の行為を、つくり手や使い手、環境、素材、持続性など、さまざまな視点・立場から見直していくプロジェクトで、〈たんぼぼの家〉と〈Good Job!センター香芝〉が、全国各地の福祉施設やデザイナーと協働して展開している。前橋国際芸術祭2026ではニュートラが2019年から取り組んできた実践・実験から、地域固有の素材や、障害のある人と職人との交流などから生まれた、存在そのものが愛おしくなるプロダクトと、そのものづくりのプロセスを展示する。



主な参加アーティスト（※下記一覧以外にも地域と連携するプログラムに多数のアーティストが参加・出展します）

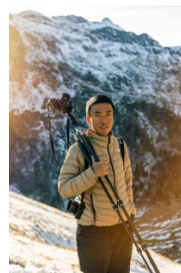
青柳いづみ（あおやぎ・いづみ）……俳優。東京都出身。マームとジブシー、チェルフィッチュの両団体で国内外の舞台で活動。漫画家・今日マチ子との共著『いづみさん』を筑摩書房より発刊。また、配信中の最果タヒの詩のレコード『こちら 99 等星』（リトルモア）に朗読で参加する他、ナレーションやエッセイの執筆など活動は多岐に渡る。（Photo by Kishin Shinoyama）



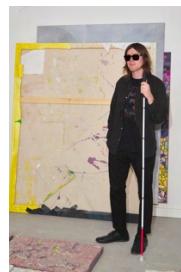
アレクサ・クミコ・ハタナカ（Alexa Kumiko Hatanaka）……アーティスト。1988 年カナダ・トロント生まれ。日系カナダ人かつクィア・アーティストであり、双極性障害とともに生きる経験が作品制作の基盤となる。主に紙を用い、版画、インクドローイング、草木染めを縫製と組み合わせ、伝統的な紙の技法と素材を現代的に再解釈する。これらはハタナカの彫刻、大規模な版画インスタレーション、着用可能な彫刻立体作品として現れ、気候変動や精神的健康、生存といった問いに応答する。風景や魚、水域のモチーフは苦しみやしなやかさ、つながり、喜びを語る。個人および共同制作の作品は、アーモリー・ショー（アメリカ）、オンタリオ美術館、大英博物館、トロント・ビエンナーレなどで展示された。その他、コレクションとしてカナダ国立美術館（カナダ）、滋賀県立美術館（日本）、マテリアル・アート・アンド・デザイン博物館（アメリカ）に収蔵。（Photo by Roya Delsol）



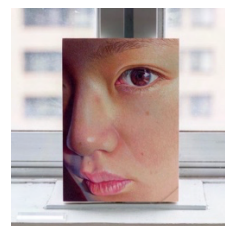
石川直樹（いしかわ・なおき）……写真家。1977 年東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、作品を発表し続けている。2008 年『NEW DIMENSION』（赤々舎）、『POLAR』（リトルモア）により日本写真協会賞新人賞、講談社出版文化賞。2011 年『CORONA』（青土社）により土門拳賞。2020 年『EVEREST』（CCC メディアハウス）、『まれびと』（小学館）により日本写真協会賞作家賞。2023 年東川賞特別作家賞を受賞した。著書に、開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』（集英社）ほか多数。最新刊に『シシャバンマ』（平凡社）、『最後の山』（新潮社）などがある。



S. Proski（エス・ポロスキ）……ビジュアルアーティスト。2023 年にボストン大学大学院美術学部絵画専攻を修了。2024 年にフルブライト奨学金を受け、ポーランド・ワルシャワで滞在制作を行う。HERALBONY Art Prize 2024 審査員特別賞（日比野克彦選）を受賞。HERALBONY とのコラボレーションにより、受賞作品を用いたスカーフを限定販売。絵画、テキスタイル、彫刻、テキストといった多様な表現を通して、失明という自身の経験と向き合いながら、美術における視覚に対するの先入観に疑問を投げかけている。直接的な観察ではなく、記憶や感覚的な手がかりから生まれる作品は、触覚性と素材の存在感を強く意識させる。



海老原イエニ（えびはら・いえに）……アーティスト。2003 年生まれ。東京藝術大学油画専攻'25 卒。日韓のハーフの女性で、香港で英語の環境で育ち、幼少期から現在まで多様な文化と認識に触れてきた。その経験を通して、自身の関わっている環境、生活や社会問題とアイデンティティとの繋がりを独自の視点から観察し、取り巻く社会に対し作品を媒体として考えを表現している。絵画を主軸に、立体や版画など多様なメディアで表現を追求し、伝えたいメッセージやテーマに合わせて適切な媒体を選択している。



尾花賢一＋石倉敏明（おばな・けんいち＋いしくら・としあき）……美術家の尾花賢一と人類学者の石倉敏明によるユニット。お互いの視点を共有しながら資料調査と現地調査を軸にした作品制作を展開する。自然・地理・歴史・民俗を横断しながら対象地域を捉え直し、その場所に暮らす人々や、歴史に残らない小さな集団・個人の記憶や伝承を物語に変え、ドローイングや彫刻を交えながら再構築している。主な活動として「赤城山リミナリティ」（アーツ前橋、2019）、「藻が海へテログラフイー」（山形ビエンナーレ、2020）、「多摩川ジオントグラフイー」（調布市文化会館たづくり、2024）など。（Photo by Yu Kusanagi）



川俣正（かわまた・ただし）……1953年北海道三笠市生まれ、フランス在住。第40回ヴェネツィア・ビエンナーレ（1982年）、ドクメンタ8（1987年）など大規模な国際現代美術展への出品を重ね、海外でもっともよく知られる日本人アーティストの一人である。横浜トリエンナーレ総合ディレクター、東京藝術大学大学院教授、パリ国立高等芸術学院教授などを経て、現在はパリを拠点とする。既存の美術表現の枠組みを超えて、建築や都市計画、歴史や地域コミュニティといった異なる分野と積極的に関わり、長期的なプロジェクトをダイナミックに展開するスタイルはアートシーンに大きな影響を与え続けてきた。主な展覧会・プロジェクトに「川俣正・東京インプログレス」（東京／2010-2013年）、「椅子の回廊」（サルベトリエール病院サン・ルイ教会、フランス／1997年）、「ワーキング・プログレス」（アルクマー、オランダ／1996-1999年）、「Destroyed Church」（カッセル、ドイツ／1987年）などがある。



カール・ストーン（Carl Stone）……アメリカ・ロサンゼルス出身の作曲家、電子音楽家。サンプリングやコンピュータを用いたライブ・エレクトロニクスの先駆者として知られ、日常音や既存音源を精緻に編集・変容させる独自の作風で高い評価を得ている。ミニマル・ミュージックや実験音楽の流れを汲みながらも、ポップス、環境音、即興性を横断する作品を多数発表。長年にわたり日本を拠点に活動し、国内外のフェスティバル、美術館、コンサートホールなどで演奏・展示を行っている。（Photo by Masa Hosojima）



木々津鏡（きぎつ・かがみ）……2000年東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻在籍。身近なモチーフを通して記憶や時間の揺らぎを描き、新たな風景の創造を試みる油彩画を制作。2025年「CAF賞2025」入選、「MUWA NISEKO AiR2025」優秀賞、「第12回未来展」東京海上日動未来賞受賞。個展「Cutting melon」（TURNER GALLERY, 2024）、「くもりガラスの両手」（MIDORI.so 中目黒, 2025）ほか多数の展覧会に参加。（Photo by Kenshu Shintsubo）



クリストフ・シャルル（Christophe Charles）……フランス・マルセイユ生まれ、東京在住。環境音やフィールドレコーディングを用い、コンピュータ・プログラムによる作曲を行うサウンドアーティスト、作曲家。個々の音の自律性や、階層構造を持たない音響構成を重視した作品で知られる。音響、映像、インスタレーションを横断しながら、国内外で作品発表や演奏活動を行っている。田中悠美子・義太夫三味線・エレクトリック大正琴奏者・作曲家。古典芸能界で活動する一方、実験音楽・現代音楽・即興演奏・舞台・映像音楽など幅広く活躍。カール・ストーン、ジョン・ゾーン、イクエ・モリ、ジム・オルーク、大友良英ら国内外の音楽家と共演。現代音楽では柴田南雄、高橋悠治、三輪眞弘、藤倉大などの作品を演奏する。



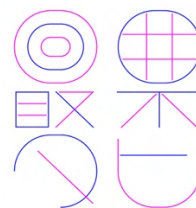
クワクポリョウタ……メディアアーティスト。跡見学園女子大学情報科学芸術センター（AISAC）特任教授。移動点光源を用いた光と影のインスタレーション《LOST》シリーズを国内外で発表。Perfektronとして「デザインあ展 neo」の展示構成なども手掛ける。



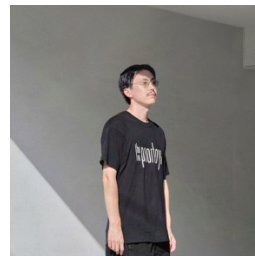
小暮香帆（こぐれ・かほ）……ダンサー・振付家。舞台芸術、音楽フェスティバル、メディアなど様々なシーンで動きの美学を展開。即興から身体への新たなアプローチを探り、振付/表現する。また他分野のアーティストとのコラボレーション、多くの振付/演出家作品に出演、10カ国31都市で本番を迎える。近年ではFESTIVAL de FRUE、映画、CMへの振付出演、笠井爾示×小暮香帆 写真展「second hand」、「beautiful people 2023 SS」パリコレクション出演、ワークショップ講師等。近年の作品『Dear』（2023）『霧と斜面の隙間風』『inner silence』（2026）など。（Photo by Yuka Uesawa）



最果タビ（さいはて・たひ）……詩人。2004年よりインターネット上で詩作を始め、2006年に第44回現代詩手帖賞受賞。2008年、第1詩集『グッドモーニング』で第13回中原中也賞受賞。2015年、第3詩集『死んでしまう系のぼくらに』で第33回現代詩花椿賞受賞。2017年、第4詩集『夜空はいつでも最高密度の青色だ』が石井裕也監督により映画化。2024年、第12詩集『恋と誤解された夕焼け』で第32回萩原朔太郎賞受賞。エッセイ集『きみの言い訳は最高の芸術』、小説『十代に共感する奴はみんな嘘つき』など著書多数。2018年、太田市美術館図書館の企画展に参加。2019年は横浜美術館で初の個展を開催。著名アーティストへの作詞提供ほか、ホテルとのコラボ企画「詩のホテル」や詩とプラネタリウムを融合した作品発表など活動の場は幅広い。



佐々木俊（ささき・しゅん）……グラフィックデザイナー。2010 年多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業。2016 年 AYOND（アヨンド）を設立。これまでに、詩人・最果タヒの『夜空はいつでも最高密度の青色だ』等の著書や詩の展示構成、2019 年展覧会「デザインの（居）場所」（東京国立近代美術館）、2021 年「NHK 紅白歌合戦」番組ロゴ等のデザイン・アートディレクション、2023 年「ハヤカワ新書」装丁などを担当。参加展示に、2018 年「ことばをながめる、ことばとあるくー詩と歌のある風景」（太田市美術館・図書館）などがある。主な受賞歴として、2020 年 JAGDA 新人賞、2024 年世界ポスタートリエンナーレトヤマ銀賞がある。



サム・フォールズ（Sam Falls）……1984 年、アメリカバーモント州出身。現在はロサンゼルスとニューヨークの 2 拠点で制作活動を行う。アメリカのリード大学で物理学、言語学、哲学などを学んだ後、2010 年 ICP バード芸術研究課程修了。主な個展に「We Are Dust and Shadow」（クリーブランド現代美術館、オハイオ州、2023 年）、「Nature Is the New Minimalism」（トレント・ロヴェレート近現代美術館、イタリア、2018 年）、アーマンド・ハマー美術館（ロサンゼルス、2018 年）、The Kitchen（2015 年）、Ballroom Marfa（テキサス、2015 年）があり、第 21 回シドニービエンナーレ（2018 年）にも参加。また近年日本での作品発表も続いており、2025 年には金沢 21 世紀美術館、下瀬美術館、タグチアートコレクションでのグループ展に出展している。フォールズは、大気、植物、光、時間、そして自然の偶然性との緊密なコラボレーションを通じて、美学と環境を深く結びつける共生的な芸術アプローチを確立。自然環境とのコラボレーションで制作を行い、主に屋外で植物や大気と向き合っている。初期の絵画における死や象徴性といったテーマから、ランドアートの場所性やミニマリズムにいたる美術史にインスピレーションを受け、ペインティング、彫刻、写真という媒体をより有機的・根源的に結びつけている。太陽や雨という自然の要素と直接向き合い作品を作ることで、フォールズは環境と共生しながら自然を親密に表現し、人は自然の中に存在していることを示すアートを創造し続けている。（Photo by Martin Crook）



渋谷慶一郎（しぶや・けいいちろう）……音楽家。東京藝術大学作曲科卒業。作品は先鋭的な電子音楽作品からピアノソロ、オペラ、映画音楽、サウンドインスタレーションまで多岐にわたり、東京・パリを拠点に活動を行なう。2012 年にボーカロイド・オペラ『THE END』を発表し、パリ・シャトレ座公演を皮切りに世界中で巡回。2018 年以降はアンドロイド・オペラの制作を本格化し、『Scary Beauty』『MIRROR』を国内外で発表。2025 年にはサントリーホールにて「アンドロイド・オペラ『MIRROR』－Deconstruction and Rebirth－解体と再生－」を上演し、2026 年 5 月に大阪・フェスティバルホールで再演した。これまでにパリ・オペラ座、シャトレ座、ドバイ万博、新国立劇場、サントリーホールなど国内外の劇場を中心に作品を発表。人間とテクノロジー、生と死の境界を作品を通して問いかけている。（Photo by Grégoire Alexandre）



ジム・オルーク（Jim O'Rourke）……実験音楽、ロック、電子音楽、映画音楽など幅広い分野で活動するアメリカ出身の音楽家、作曲家、プロデューサー。これまでに Sonic Youth、Wilco、Merzbow など数多くのアーティストと協働する一方、即興演奏、ミニマリズム、ポップソングを横断する独自のソロ活動でも高い評価を得ている。現在はパートナーである音楽家の石橋英子と共に山梨県北杜市在住。



白川昌生（しらかわ・よしお）……1948 年福岡県北九州市戸畑生まれ。1970 年代にフランス、ドイツで哲学と美術を学ぶ。1981 年デュッセルドルフ国立美術大学卒業。修士称号を受ける。1983 年に帰国後、群馬を拠点に自らの住む場所をテーマに制作活動を行う。近年の主な展覧会として、個展「白川昌生展 ここが地獄か、極楽か。」（丸木美術館、2021）、「表現の生態系 世界との関係をつくりかえる」（アーツ前橋、2018）、個展「消された記憶-長崎/ 群馬」（コンセプトスペース、2018）、「群馬の美術 2017—地域社会における現代美術の居場所」（群馬県立近代美術館、2017）「あいちトリエンナーレ 2016—虹のキャラヴァンサライ」（2016）など。（Photo by Shinya Kigure）



すずえり……音を中心に、電子工作、自作楽器、パフォーマンス、インスタレーションなど多様な表現を横断するアーティスト、音楽家。日用品や電子部品、廃材などを用いた独自の装置制作を行い、身体性とユーモアを伴った即興的な演奏や空間表現で知られる。国内外の美術館、ライブハウス、フェスティバルなどで活動し、実験音楽やメディアアートの領域で幅広く作品を発表している。



関口光太郎（せきぐち・こうたろう）……1983年、群馬県前橋市生まれ。小学3年生の夏休みに、初めて新聞紙とガムテープを使ってステゴサウルスを作る。多摩美術大学彫刻科の卒業制作では、6メートルを超える『瞬間寺院』を制作。2012年、第15回岡本太郎現代芸術賞受賞。2014年、講談社より『親子で自由研究 新聞紙とガムテープでこんなにつくれた』出版（現在は電子書籍）。2019年「In BEPPU」、2023年アーツ前橋会館10周年記念展「ニューホライズン 歴史から未来へ」、2024年「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2024」に招聘。旭出学園（特別支援学校）勤務の傍ら、全国各地で新聞紙×ガムテープアートの制作・展示やワークショップを行う。



高田裕介（たかだ・ゆうすけ）……独自性と前衛的なスタイルで国際的に高い評価を受ける、アジアを代表する日本人シェフ。フランス料理の精緻な技法を基盤に、食材・文化・芸術・音楽からインスピレーションを得ながら、既成概念にとらわれない独自の料理世界を創り上げる。奄美大島の生まれで、島の豊かな自然から培った感性を糧に、日本のガストロノミーに新たな潮流をもたらしている。



田所淳（たどころ・あつし）……共愛学園前橋国際大学教授。クリエイティブコーダー。アルゴリズムを用いた音響合成による音楽作品の創作、ラップトップコンピュータを用いた音と映像によるライブコーディングを行う。近年は音響と映像を融合したインスタレーション作品や、ライブコーディングのパフォーマンスを、アルスエレクトロニカ・フェスティバルをはじめ国内外で作品を発表している。クリエイティブコーディングやライブコーディングに関する技術資料をWebサイトで公開、多くの学生やクリエイターに活用されている。著書に『Processing クリエイティブ・コーディング入門——コードが生み出す創造表現』『Beyond Interaction [改訂第3版]——クリエイティブ・コーディングのためのopenFrameworks実践ガイド』など。（撮影：三浦麻旅子）



田中悠美子（たなか・ゆみこ）……義太夫三味線・エレクトリック大正琴奏者／作曲家。古典芸能界で活動する一方、実験音楽・現代音楽・即興演奏・舞台／映像音楽など幅広く活躍。カール・ストーン、ジョン・ゾーン、イクエ・モリ、ジム・オルーク、大友良英ら国内外の音楽家と共演。現代音楽では柴田南雄、高橋悠治、三輪眞弘、藤倉大などの作品を演奏する。



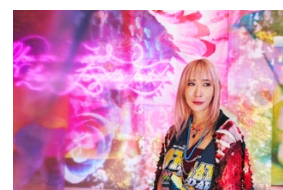
ドットアーキテツ（dot architects）……2004年に設立された建築家ユニット。大阪・北加賀屋にて、〈もうひとつの社会を实践するための協働スタジオ〉コーポ北加賀屋を拠点に活動。設計、施工のプロセスにおいて専門家・非専門家に関わらず様々な人との協働を実践している。設計だけに留まらず、現場施工、リサーチプロジェクト、アートプロジェクトなど様々な企画にもかかわる。現在のメンバーは家成俊勝、赤代武志、土井亘、池田藍、宮地敬子、勝部涼亮、小林明日香、倉橋風人の8名。主な作品に「Umaki camp」（2013, 香川）、「千鳥文化」（2017, 大阪）、「仮の家」（2022, 静岡）などがある。



ナイトウカツ……写真家・ディレクター。18歳で単身渡米し、40年以上にわたりニューヨークで撮影を続け、2025年に帰国した。静謐で観察的なまなざしを基盤に、1990年代のハーレムやマンハッタンで周縁的なコミュニティと長い時間を共有し、その人間像を丁寧に掬い上げてきた。代表作『West Side Rendezvous』（2010）と『Once in Harlem』（2017）は、被写体の尊厳と日常の奥行きを描き評価されている。作品は国際的に発表され、HBO『The Stroll』（2023）、FOX『The Woman in the Window』（2021）、Apple TV『Ripple Effects』（2021）にも使用された。2023年には Rema Hort Mann Foundation から奨学金を授与。現在は群馬県前橋市在住。



蜷川実花（にながわ・みか）……写真家、映画監督、現代美術家。写真を中心として、映画、映像、空間インスタレーションも多く手掛ける。クリエイティブチーム EiM（エイム）の一員としても活動中。木村伊兵衛写真賞ほか数々受賞。2010年ニューヨークの Rizzoli から写真集を出版。『ヘルタースケルター』（2012年）ほか長編映画を5作、Netflix『FOLLOWERS』（2020年）を監督。これまでに写真集120冊以上を刊行、個展150回以上、グループ展130回以上と国内外で精力的に作品発表を続ける。個展「蜷川実花展 with EiM：彼岸の光、此岸の影」（2025, 京都市京セラ美術館）は25万人を動員した。



萩原朔美（はぎわら・さくみ）……1946年11月、東京都生まれ。寺山修司が主宰した「天井桟敷」の旗揚げ公演で初舞台を踏む。俳優の傍ら、演出を担当し映像制作も始める。版画や写真、雑誌編集とマルチに才能を発揮する。一昨年全ての版画、写真、オブジェが、世田谷美術館に収蔵された。著書多数。多摩美術大学名誉教授。前橋文学館特別館長。前橋市文化芸術活動顧問。



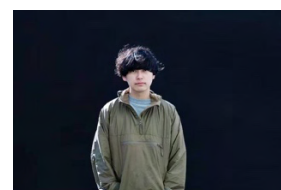
浜田岳文（はまだ・たけふみ）……1974年兵庫県宝塚市生まれ。米国イェール大学政治学部卒業。これまでに世界128カ国・地域を訪問し、1年のうち5カ月を海外、3カ月を東京、4カ月を地方で食べ歩き、国内外のメディアで食と旅に関する情報を発信している。2025年11月より「世界のベストレストラン50」および「アジアのベストレストラン50」日本評議委員長に就任。海外レストランサイトのレビューランキングでは8年連続1位を獲得し、世界的美食家として知られる。2024年6月、『美食の教養 世界一の美食家が知っていること』（ダイヤモンド社）を出版。



原田郁子（はらだ・いくこ）……1975年福岡生まれ。1995年にミト、伊藤大助と3ピースバンド「クラムボン」を結成。歌と鍵盤を担当。バンド活動と並行して、ソロ活動、さまざまなミュージシャンとの共演、共作、執筆、ドローイングなど活動は多岐にわたる。吉祥寺「キチム」の立ち上げに関わる。これまでにソロアルバム『ピアノ』『気配と余韻』『ケモノと魔法』『銀河』、2023年に詩人・谷川俊太郎との共作曲「いまここ」、アルバム『いま』を発表。2026年にリリースされた、二階堂和美のニューアルバム『潮汐』にプロデュースで参加。マームとジプシーとは、舞台「cocoon」「めにみえない みみにしたい」「かがみ まど とびら」の音楽を担当、作品作りを共にしている。



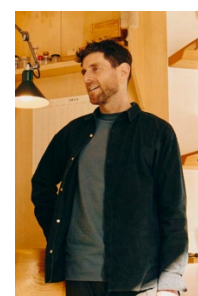
藤田貴大（ふじた・たかひろ）……1985年4月生まれ。北海道伊達市出身。出生地は前橋。桜美林大学文学部総合文化学科にて演劇を専攻。07年マームとジプシーを旗揚げ。以降全作品の作・演出を担当する。作品を象徴するシーンを幾度も繰り返す“リフレイン”の手法で注目を集める。11年6月-8月にかけて発表した三連作「かえりの合図、まっていた食卓、そこ、きっと、しおふる世界。」で第56回岸田國士戯曲賞を26歳で受賞。以降、様々な分野の作家との共作を積極的に行うと同時に、演劇経験を問わず様々な年代との創作にも意欲的に取り組む。13年、15年に太平洋戦争末期の沖縄戦に動員された少女たちに着想を得て創作された今日マチ子の漫画『cocoon』を舞台化。同作で2016年第23回読売演劇大賞優秀演出家賞受賞。演劇作品以外でもエッセイや小説、共作漫画の発表など活動は多岐にわたる。



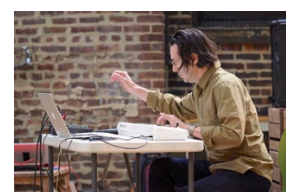
マイカ・シルバー（Micah Silver）……サウンド、空間、テクノロジーの交差点で活動するアメリカ人アーティスト／作曲家。文化空間のデザインに音を統合するコレクティブ〈Polytope〉の共同設立者であり、美術館、建築家、展示デザイナーらと協働している。現在、東京を拠点とする没入型リスニング・スペース〈Black Hole〉を設立している。



マイク・エーブルソン（Mike Abelson）……デザイナー。2000年にNYブルックリンでポストアルコデザインスタジオを共同創業し、25年間にわたり東京を拠点に活動している。日本の職人技術と現代の暮らしを結びつけることをテーマに、プロダクト、アパレル、インテリア、展覧会のデザインなど幅広い分野で制作を続けている。これまでに、カリモク家具株式会社、カルダー財団、三菱鉛筆株式会社、メゾンエルメスなど多様な企業や団体と協働。近年の主な展覧会に「Paper Trail: Everything is a Prototype for the Future」（2025, Atelier Muji Ginza）、「Body Centered」（2022, カリモクコモンズ）などがある。また、21_21 Design Sightでも作品を発表している。共著に「Swimming In Puddles」（2017年）、「Viewpoint in the Fog」（2025年）がある。素材の研究を継続しながら、伝統技術が現在と未来の課題にどう応えられるかを探求している。



マイケル・シューマツハ（Michael J Schumacher）……アメリカ・ニューヨークを拠点に活動する作曲家、サウンドアーティスト。持続音や微細な音響変化を用いた空間的なサウンド・インスタレーションやマルチチャンネル作品で知られ、建築空間や環境との関係性を重視した作品制作を行っている。電子音響、ミニマル・ミュージック、即興性を横断しながら、聴覚体験そのものを問い直す作品を国内外で発表。美術館、ギャラリー、公共空間など多様な場で展示・演奏活動を行っている。



マルタン・マルジェラ (Martin Margiela) ……1957 年ベルギー・ルーヴェン生まれ。アントワープ王立芸術学院卒業後、ジャン＝ポール・ゴルチエのアトリエでデザインアシスタントをスタート。1988 年にジュニー・メレンズとともにパリで〈メゾン マルタン マルジェラ〉を設立、初のショーを発表。20 周年ショーを機にファッション界を離れビジュアルアートに専念し、2019 年にビーレフェルト美術館にて初のグループ展に参加。2021 年にパリのラファイエット・アンティシパシオンで開催した初個展が、北京のエムウッズ、ソウルのロッテ美術館に巡回する。2023 年に Eenwerk Gallery (アムステルダム) にて個展、2024 年に Bernier / Eliades Gallery (ブリュッセル / アテネ) にて個展を開催。今年 4 月には日本初となる大規模個展を九段ハウスにて開催。タカ・イシイギャラリー京都での展覧会と併せて大きな話題を呼んだ。



ミロコマチコ ……画家。いきものの姿を伸びやかに描き、国内外で個展を開催。絵本『オオカミがとぶひ』（イースト・プレス）で第 18 回日本絵本賞大賞を受賞。ブラチスラバ世界絵本原画ビエンナーレ (BIB) で、『オレときいろ』（WAVE 出版）が金のりんご賞、『けもののにおいがしてきたぞ』（岩崎書店）で金牌を受賞。その他にも受賞歴、著書多数。第 41 回巖谷小波文芸賞受賞。本や CD ジャケット、ポスターなどの装画も手がける。2020 年から、展覧会「いきものたちはわたしのかがみ」が全国美術館を巡回。自然の動きと密接なつながりを感じながら、見えないものの気配や生命の煌めきが濃厚に漂う作品を生み出している。



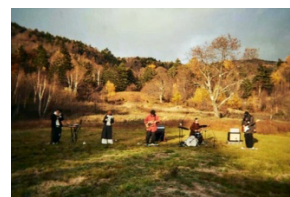
ラスムス・ムンク (Rasmus Munk) ……1991 年デンマーク・ランダース生まれ。ロンドンでのキャリアを経て、2015 年にコペンハーゲンに〈Alchemist (アルテミスト)〉を開業。2019 年、工業地区レフシャレーエンの旧倉庫に移転した現在の〈Alchemist〉で「ホリスティック・キュイジーヌ」を確立。アート、演劇、科学、テクノロジー、ガストロノミーを融合した 6 時間に及ぶ体験は、気候変動・社会的不平等・食品ロスといった現代社会の問いを料理という言葉で語りかける。ミシュラン 2 つ星。The World's 50 Best Restaurants 2025 年第 5 位。OAD ではヨーロッパベストレストランを 5 年連続受賞。2020 年にはホームレス支援の無料食事提供チャリティ〈JunkFood〉を設立、累計 110 万食以上を提供。(Photo by Mathias Eis)



レア・エンベリ (Lea Embeli) ……アーティスト／画家。2017 年にベオグラード藝術大学応用芸術学部応用絵画学科を卒業、2018 年に修士課程を修了。教育・科学・技術開発省およびセルビアの若い才能のための財団より奨学金を授与される。学業成績優秀者に贈られるアレクサンダル・トマシェヴィッチ賞、応用絵画分野の ULUPUDS 賞、若手アーティストに贈られるヴチュコヴィッチ賞を受賞。2021 年、文部科学省 (MEXT) 奨学金を受けて東京藝術大学大学院油画研究科に留学し、2023 年 4 月から正規生として 2 度目の修士課程に進学、2025 年 3 月に修了。現在もセルビアと日本を拠点にアーティストとして活動している。(Photo by Kenshu Shintsubo)



LOLOET (ロロエ) ……2023 年、和田彩花がパリ留学中、より自由な音楽表現を求めて東京のミュージシャンたちと LOLOET を結成。パリでのフィールド・レコーディングや東京でのスタジオ・ワークを重ね、2023 年 10 月、初の楽曲『SCEUR』を発表。続いて、和田が帰国後の 2024 年 3 月、『une petite pensée』を自主レーベルよりカセットテープと配信にてリリース。さらに 2025 年 5 月には、シングル『ELLE』をアナログレコードでタフビーツよりリリースしている。関係し合いながらめぐり、ひびく〈環響音〉をテーマに、アンビエントドローン、DUB、実験音楽、環境音楽、即興演奏などに日本の祭祀的高揚感を取り入れたオルタナティブな音楽性で、ライブハウスのみならず、本屋、美術館、アートのスペースなど場所を選ばず活動している。



山縣良和 (やまがた・よしかず) ……writtenafterwards 代表 coconogacco 代表。1980 年、鳥取生まれ。2005 年セントラル・セント・マーチンズ美術大学ファッションデザイン学科卒。2007 年にファッションレーベル〈writtenafterwards〉を設立。2009 年にオランダ・アーネム・モード・ビエンナーレにてオープニングファッションショーを開催。2015 年には、日本人として初めて LVMH Prize にノミネート。また、デザイナーとしての活動のかたわら、ファッション表現の実験と学びの場として〈coconogacco〉を主宰し、2021 年には、第 39 回毎日ファッション大賞 鯨岡阿美子賞を受賞。近年の主な展覧会出展に、2017 年「装飾は流転する」(2019-2020, 東京都庭園美術館)、「アジアのイメージ」(2021, 東京都庭園美術館)、「ファッションインジャパン」(2023, 国立新美術館)、「ミレーと 4 人の現代作家たち」(2024, 山梨県立美術館)、「ここにいてもいい リトゥンアフターワーズ」(2024, アーツ前橋) など。(Photo by Takashi Honma)



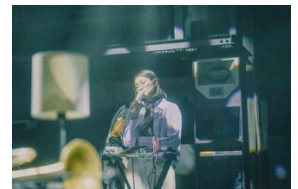
山田紗子（やまだ・すずこ）……建築家。1984年東京都生まれ。大学在学時にランドスケープデザインを学び、藤本壮介建築設計事務所設計スタッフとして勤務の後、東京藝術大学大学院に進学。在学時に東京都美術館主催「Arts&Life：生きるための家」展で最優秀賞を受賞し、原寸大の住宅作品を展示する。独立後の主な仕事として、屋内外を横断する無数の構造材によって一体の住環境とした《daita2019》等の住宅作品や、樹木群と人工物が渾然一体となる環境を立ち上げる2025年大阪関西万博休憩施設などがある。主な受賞に、第三回日本建築設計学会賞大賞、第三十六回吉岡賞、Under 35 Architects exhibition 2020 Gold Medal、第三回小嶋一浩賞など。



吉開菜央（よしがい・なお）……映像作家・ダンサー。世界を五感で理解しようとする時に、心と身体に起こる変化を「踊り」と捉え、その感覚を軸に映画を制作。主な監督作品に『Shari』（ロッテルダム国際映画祭 2022 公式選出）、『Grand Bouquet』（カンヌ監督週間 2019 正式招待）、『ほったまらびより』（第19回文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門新人賞）。演者として映画出演、舞台作品の演出・美術も手掛ける。（Photo by Atsuko Chiba）



和田彩花（わだ・あやか）……群馬県高崎市出身。アイドル。2019年ハロー！プロジェクト、アンジュルムを卒業。アイドルグループでの活動経験を通してフェミニズム、ジェンダーの視点からアイドルについて、アイドルの労働問題について発信する。オルタナティブバンド「和田彩花とオムニバス」、ダブ・アンビエンスのアブストラクトバンド「LOLOET」にて作詞、歌、朗読等を担当する。実践女子大学大学院博士前期課程美術史学修了、美術館や展覧会について執筆、メディア出演する。



主なプログラム（アートプロジェクト、公演、イベント等）

〈NEW!〉で紹介したプログラムは下記のプログラム一覧には入っておりません。

sub low（サブ・ロー）……アーティストの八木隆行が2012年から運営するオルタナティブ・スペース〈ya-gins（ヤーギンズ）〉は、全国的にも珍しい曲がりくねったアーケード商店街・弁天通り商店街の一角にあるオルタナティブ・スペース。群馬ゆかりのアート関係者が集う交流の起点であり、まちあるきとアートを組み合わせたアートフェスティバル「River to River 川のほとりの芸術祭」を主催するなど、地域に根ざした活動を続けてきた。前橋国際芸術祭2026では〈ya-gins〉と〈Maebashi Works〉〈map〉の三団体による連携企画「sub low」を開催。アーケード商店街の各所で、この街のアート×日常をつくってきたアーティストたちの活動と作品を紹介する。参加作家は飯沢康輔、関根健一、天笠恵子、カナイサワコ、寺澤由樹、柏瀬克也、光景旅団（中村ひろみ、郡司厚太、東野善典）、河津慧、堀越吉行、せきあおい、平井陽子、増谷幸恵、西松秀祐。



ネオ・ネオ・ダダダ MAEBASHI……写真家の木暮伸也が馬場川通りで主宰するオルタナティブスペース〈裏ノ間 re/noma maebashi〉では、第一回前橋国際芸術祭2026の期間中、今年で第17回の開催となる前橋映像祭とその運営メンバーである現代美術作家の白川昌生、藤井光による複合企画展「ネオ・ネオ・ダダダ MAEBASHI」を開催する。前橋映像祭は一般公募の映像祭で、毎回上映後にトークセッションが組み込まれている。今回はさらに作品展示と宮森みどりによるアーティスト・イン・レジデンスを展開する拡大企画となり、芸術祭期間中に〈裏ノ間〉でおこなう交流そのものを作品化していく。



寺町藝術センター《ほどく・つくろう・あみなおす》……古くからの住民に〈寺町〉と呼ばれている前橋市三河町。敷島公園で40年間にわたって良書とアートを紹介してきたフリッツ・アートセンターの小見純一が、生まれ育った三河町に新たに設立する〈寺町藝術センター〉は、街区の新陳代謝のなかで静かに消えようとしていた2棟の空きビルを、芸術家、旅人、そして地域の人々が日常的に交差する劇場やアートホテルへと再生させるプロジェクト。寺藝は単なるリノベーションプロジェクトではなく、路地が消え、家々が形を変え、人びとの共同の記憶が薄れゆくいま、凝り固まった思考や価値観を〈ほどき〉、壊れかけた地域の関係性を〈つくろい〉、時代の変化によってバラバラになった土地の物語を〈あみなおす〉ための創造の場づくりである。芸術祭の期間中を通して、演劇上演、アート展示、映画祭、音楽ライブなど、寺藝に集まるコミュニティによる多彩な表現を即興的に生み出していく。



MAEBASHI ART MARKET – 持ち帰る芸術祭 Produced by MEET YOUR

ART with 風街夕やけマルシェ……「アートと出会う」をコンセプトにエイベックス・クリエイター・エージェンシーが手がけるアートプロジェクト〈MEET YOUR ART〉が、前橋国際芸術祭 2026 公式アートマーケットをプロデュース。前橋の街なかで毎週開催される〈風街夕やけマルシェ〉とのコラボレーションのもと、芸術祭を〈鑑賞する場〉から街なかでアートと出会い・選び・持ち帰ることのできる場へと拡張する試みとして、アーケード商店街にアート・食・ファッション・クラフトが交差するマーケットを出現させる。若手作家によるドローイング・マーケットや、群馬のカルチャーを再解釈したセレクトショップなど、この場所・この2日間にしか生まれない〈表現としてのマーケット〉が立ち上がる。(Photo by Keisuke Maeda)



めぶく。カンファレンス……〈めぶく。カンファレンス〉は、前橋国際芸術祭 2026 の参加アーティストによるレクチャーや公開インタビュー、リサーチプロジェクトの活動報告をおこなう座学プログラム。アーティストたちが前橋をリサーチして生み出した作品を手がかりに、自然、都市、食文化、多文化共生、戦争・災害など、国際芸術祭の舞台にふさわしい、グローバルで普遍的なテーマを議論する場をひらく。



Funclution Hall (ファンクルージョン・ホール) ……「異彩を、放て。」をミッションに掲げるアートライフスタイルブランド〈ヘラルボニー〉が、芸術祭期間中の「国際障害者週間」(12/3～12/9)の週末に、〈FUN(楽しさ)〉と〈Inclusion(包摂)〉を融合させた〈FUNclution(ファンクルージョン)〉をコンセプトに体験型ワークショップ・ガーデンを創出。多彩なクリエイターによる、五感を使う多彩な〈FUNclution〉体験により、一人ひとりのなかにある〈あたりまえ〉を柔らかにほぐしていく。会場はアーツ前橋に隣接するミヤケン元気 21 にぎわいホール。(撮影：橋本美花)



Algorave Maebashi (アルゴレイヴ・マエバシ) ……〈アルゴレイヴ〉とはアルゴリズム

(Algorithm) とレイヴ (Rave) を組み合わせた、ライブエレクトロニクスとコンピューター音楽における最先端の音楽シーンのこと。ミュージシャンがプログラミングコードをリアルタイムで記述しアルゴリズムを用いて演奏する「Algorave」を、クリエイティブコーダー・田所淳のキュレーションにより前橋で初開催する。会場は半ば廃墟化していたビルに、田所とパソコン周辺機器メーカー BUFFALO INC.が仮設する前橋国際芸術祭 2026 の公式クラブ〈グーチョキパークラブ〉。廃墟は文明の終着点ではなく自由の出発点である。廃墟の空間に響く人と機械が共創する電子音は都市の記憶と未来を交差させ、新たな可能性が〈めぶく〉契機になるだろう。



「すべての人がめぶく」映画祭……第一回 前橋国際芸術祭 2026 の開催テーマ〈めぶく。〉

にあわせて、アーツ前橋の上階にあるミニシアター〈前橋シネマハウス〉が企画する特集上映会。様々な土地で人は人生のある時期、とても充実した日々を過ごし、光り輝くことがある。たとえば日常のほとんどが厳しく辛くても。そのように日々が輝き「めぶく」姿を捉えた珠玉の映画を、前橋シネマハウス支配人・日沼大樹とアーツ前橋館長・出原均によるセレクションで紹介する。上映作品は『コンパートメント No.6』(フィンランド/2021年)、『ビッグ・リトル・ファーム 理想の暮らしのつくり方』(アメリカ/2018年)、『オキナワより愛をこめて』(日本/2024年)、『すべての些細な事柄』(フランス/1996年)、『今日から僕が村の映画館』(ペルー/2022年)など。



© 2018 FarmLore Films, LLC

前橋国際芸術祭 2026 オープンダイアログ……まちづくりビジョン〈めぶく。〉策定から

10年。前橋では、街の再出発の希望を描く建築が次々に生まれ、街の人々の活動とともにその再生をドライブしてきた。芸術祭が始動する 2026 年は、ビジョン策定から 10 年を迎える節目の年となる。既にハード面が整いつつあるこの街において、前橋らしさを発揮しながら、地域や他の場所との関係性を育て、次の再生の物語へと歩みを進めていくために、いま何が求められているのだろうか。芸術祭公式の本オープンダイアログでは、そのインスピレーションを前橋の外で活動する人々の実践に触れながら見つめていくプログラム。ドットアーキテクトが街の人々とともに作り上げる集いの空間の中で、それぞれの地域にある文化や価値、実践者のまなざしに目を向けながら、この場所から次の風景をひらく手がかりを探る。



小野田賢三《マエバシタクシー》

……前橋を拠点に活動するコンセプチュアルアーティスト・小野田賢三がタクシードライバーに扮し、仮設の停留所から観客を乗せ、変わりゆく前橋の街へと誘うユニークな試み。乗客たちは映画制作者として市内各所でロケハンを行い、写真や映像を撮影。撮影データは小野田の手によって多視点のカラージュやロードムービーへと、前橋国際芸術祭の閉幕までリアルタイムに接合・増幅していく。前橋の日常風景が、街区の外からやってくる観客の眼差しで記録されアートへと昇華する、観客とアーティストの共同制作プロジェクト。



駅家の木馬祭り

……現代美術作家・白川昌生が 2011 年に始め、現在まで続いているアートプロジェクト。江戸後期～明治期の前橋を舞台にした物語を実際に再現し、カラフルな木馬とともに街なか一円を練り歩き、震災やコロナからの復興、犠牲者の鎮魂、まちなかの賑わいを願い続けている。〈駅家（うまや）〉とは、前橋の名前のもとになった言葉で、城のそばの馬をつないでおく小屋を意味する。



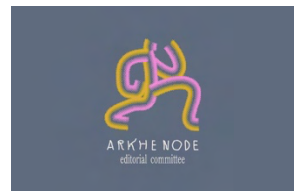
SITE PORTAL

(サイト・ポータル) ……前橋ローカル情報のハブとして商店街と来訪者を繋いでいる岡正己の〈Bentena SHOP〉と、群馬と東京を拠点に家具や店舗から住宅、公共施設まで幅広く設計・監理を行う建築設計事務所〈SNARK Inc.〉による企画。まちの〈普段の顔〉や〈使い方〉を大胆に変える象徴的な入口（PORTAL）を、前橋各地にパラサイト的に出現させる。路地や公園、空き地などに入口を設置し、くぐればその場所の機能や用途が変わる体験を創出。神出鬼没に現れ移動しながら、新たな価値や可能性を引き出し、まちの風景と人々の行動を拡張する。



移動式公開編集会議アルケノード

……長らくシャッターストリート化に苦しんでいた前橋市中心市街地に、近年、若い世代による個性的なスモールビジネスの出店が続いている。《アルケノード》はその仕掛け人で、前橋市役所にぎわい商業課の田中隆太を中心とする市民有志の編集チーム。文学好きの結節点となっているカフェ兼個人書店〈本屋 水紋〉を拠点に、田中がサポートした出店者や移住者のストーリーを紹介する ZINE の制作プロセスを公開しながら、全国各地から地域に根ざした編集活動を行うゲストを招く勉強会や、掲載した店舗を訪ねるまち歩きツアーなど、ウチ/ソトの視点から〈まちを観察し編集する〉多彩なプログラムを実施する。



Noie

(のいえ) ……京都・日本橋・高円寺などでアートホテルを展開する BnA（ビー・エヌ・エー）が、「寺町藝術センター」の小見純一が所有する前橋市三河町の 3 階建てビルを引き継ぎ、超小型芸術複合施設〈Noie〉を誕生させる。寺社が密集する同エリアは製糸業の労働者や旅芸人など、古くから多様なバックグラウンドの人々を受け入れてきた歴史があり、前橋空襲の際は焼き出された人々が境内にバラック街を築いたという。〈Noie〉はこうした三河町のアジールの文脈を踏まえ、人々が集い、滞在し、制作し、フラットに交流できる場となることを目指す。1 階はアーティストや役者が日替わりで立つスナックとギャラリー、2 階は前橋や群馬のアーティストがコミッションワークを担当するアートホテル、3 階は長期滞在者のためのレジデンス施設となる。芸術祭期間中は〈Noie〉の外壁でパブリックアートの公開制作も行われる。アーティストとして相澤安嗣志が参加。



STREET FURNITURE EXHIBITION 2026

(ストリート・ファニチャー・エキシビション 2026) ……前橋まちなかの広瀬川沿い全長 1km のエリアで毎年秋に開催している、まちに関わるクリエイターによる自作ストリート・ファニチャーの回遊式展覧会。6 年目となる今回は例年通り 9 月に広瀬川沿いでの開催後、10 月からアーケード商店街や広場、公園、まちの隙間などに場所を移してストリート・ファニチャーが出没する予定。まち散策で疲れた身体を癒す。



今後もツアー・ワークショップ・ライブパフォーマンス・トークイベントなどが随時追加されます。また、内容は予告なく変更する場合があります。事前にご了承ください。

開催概要



タイトル 第一回 前橋国際芸術祭 2026

開催テーマ 「めぶく。Where good things grow.」

会期 2026 年 9月19日 [土] ～12月20日 [日] (80日間)

閉場日 期間中の水曜日 (9/23 [水] は祝日のため開場、翌9/24 [木] が振替閉場となります)

参加アーティスト

アレクサ・クミコ・ハタナカ、田所淳、青柳いづみ、和田彩花、カール・ストーン、クリストフ・シャルル、ドットアーキテクト、原田郁子、ジム・オルーク、小暮香帆、木々津鏡、ナイトウカツ、渋谷慶一郎、尾花賢一＋石倉敏明、関口光太郎、レア・エンベリ、LOLOET、マルタン・マルジェラ、マイカ・シルバー、マイケル・シューマツハ、マイク・エーブルソン、蜷川実花、ミロコマチコ、吉開菜央、石川直樹、ラスムス・ムンク、クワクボリョウタ、最果タヒ、萩原朔美、サム・フォールズ、佐々木俊、スズエリ、山田紗子、S. Proski、川俣正、藤田貴大、浜田岳文、海老原イエニ、山縣良和、白川昌生、高田裕介、田中悠美子 (順不同)

主なプログラム (2026 年 5 月 25 日現在)

「すべての人がめぶく」映画祭、前橋国際芸術祭 2026 オープニングライブ、アルゴレイヴ・マエバシ、移動式公開編集会議アルケノード、LOLOET Workshop Live 「本当は言いたかったこと」和田彩花＋群馬大学共同教育学部附属中学校音楽部、浜田岳文キュレーション “Food as Art ?”、Funclution Hall Produced by HERALBONY、koe oto note、「MAEBASHI ART MARKET – 持ち帰る芸術祭」Produced by MEET YOUR ART with 風街タヤけマルシェ、前橋国際芸術祭 2026 オープンダイアログ、マエバシタクシー、めぶく。カンファレンス、吉開菜央特集上映、NEW TRADITIONAL、「Noie」by BnA、ネオ・ネオ・ダダ MAEBASHI、クワクボリョウタ＋前橋工科大学阿部研究室、白井屋ホテルアートイルミネーション 2026 ミロコマチコ at SHIROIYA 《空気に根をおろす》、SITE PORTAL、STREET FURNITURE EXHIBITION 2026、sub low、寺町藝術センター《ほどく・つくろう・あみなおす》、駅家の木馬祭り (順不同)

会場

アーツ前橋、まえばしガレリア、白井屋ホテル、萩原朔太郎記念 水と緑と詩のまち 前橋文学館、前橋シネマハウス、広瀬川美術館、ハウゼビル、前橋中央通り商店街、オリオン通り商店街、裏ノ間、寺町藝術センター、ya-gins、Bentena SHOP、Maebashi Works、map、本屋 水紋、Noie、東和銀行本店併設「憩いの広場」、広瀬川河畔緑地、旧安田銀行担保倉庫

運営組織

主催 前橋国際芸術祭 2026 実行委員会

特別共催 株式会社メルコグループ

共催 前橋市

顧問 山本一太 (群馬県知事)

実行委員長／総合プロデューサー

田中仁 (田中仁財団代表理事／ジズホールディングス代表取締役 CEO)

プログラムディレクター

宮本武典 (東京藝術大学准教授／アーツ前橋チーフキュレーター)

アドバイザー

南條史生（前橋市文化芸術戦略顧問）
萩原朔美（前橋文学館特別館長／前橋市文化芸術活動顧問）
松田文登（株式会社ヘラルボニー代表取締役 Co-CEO）
牧寛之（パッファロー代表取締役社長）

役員

片貝早苗（前橋市文化スポーツ部長）
原田陽一（前橋市未来創造部長）
佐藤貴昭（群馬県地域創生部長）
金子昌彦（前橋商工会議所会頭）
石川靖（朝日印刷工業株式会社代表取締役会長）
大森昭生（共愛学園前橋国際大学学長）
植木修（前橋中心商店街協同組合理事長）
小林裕二（前橋商工会議所青年部代表幹事）
都丸貴博（前橋青年会議所理事長）
曾我孝之（前橋観光コンベンション協会理事長）、
林新一（GIS アドバンス理事長）
樋口達夫（東日本旅客鉄道株式会社 執行役員高崎支社長）

監事

稲田貴宣（前橋商工会議所 専務理事）
真庭祐次（前橋市産業経済部長）
加藤真一（公認会計士）

デザインディレクター

木住野彰悟（6D 代表）

デザイン制作

6D

コミュニケーションディレクター

笠間健太郎（アーツ・アンド・プランズ代表取締役）

事務局長

橋本薫（MMA 代表理事／まちの開発舎代表取締役）

リサーチャー

石倉敏明（人類学者／秋田公立美術大学准教授）
白井敬太郎（建築史家／前橋工科大学准教授）

アンバサダー

和田彩花

企画チーム

田所淳（クリエイティブコーダー）
高橋由佳（アーツ前橋学芸員）
阿部由布子（前橋工科大学助教）

運営・制作チーム

MMA（館孝幸、根本千沙季、寺田玲乃、茂木はるな、梶雄介、後藤美里、五十嵐美翔）、藤原羽田合同会社（藤原さゆり、羽田美恵子）、小高美穂、渡辺龍彦、広瀬川文化交流実行委員会

連携団体

前橋市（アーツ前橋）、群馬県（群馬パーセントフォーアート）、BUFFALO INC.、前橋工科大学、JR 東日本高崎支社、白井屋ホテル、ヘラルボニー、エイベックス・クリエイター・エージェンシー、小山登美夫ギャラリー、Taka Ishii Gallery、rin art association、アート・オフィス・シオバラ、MAKI Gallery、KOTARO NUKAGA、まちの開発舎、前橋シネマハウス、マチスタント、フリッツ・アートセンター、ya-gins、Bentena SHOP+ SNARK Inc.、re／noma、双子蒸留所、広瀬川文化交流、群馬朝鮮初中級学校、東京藝術大学美術学部絵画科油画第6研究室、マームとジプシー、BnA、萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち 前橋文学館、群馬大学共同教育学部附属中学校、map、Maebashi Works、たんぽぽの家、アートフロントギャラリー、イートクリエイター、音園/OtoZono、POSTALCO、リトゥンアフターワーズ、スペクトラム（順不同）

本件に関する報道関係者のお問い合わせ先

前橋国際芸術祭実行委員会事務局（前橋まちなかエージェンシー）

所在地：〒371-0022 群馬県前橋市千代田町 2-10-2 comm

営業時間：平日 9 時～18 時（担当＝寺田玲乃、根本千沙季）

電話：027-212-2117 FAX：027-212-2118 E-Mail：info@machinaka.agency